大中PRIDE

大津町立大津中学校
生徒指導通信　５号

令和５年５月１２日（金）
文責：岡村　康平

＼隠れた『ありがとう』／
「親」を1 番最初に大「切」にする

今月の１４日は「母の日」。今回はインターネット上に載っていた、ある話を引用させていただきます。

その子どもは幼い頃に父を亡くし、お母さんから女手一つで育てらました。お母さんも個人商店で一生懸命に働いていましたが、経済的にはなかなか豊かになりませんでした。息子さんは遊び盛りの小学生でしたが、遊園地や動物園など連れて行くこともできず、お母さんは内心そのことをすまなく思っていました。

そんなある日のこと、お母さんは勤め先でプロ野球のチケットを２枚もらいます。プロ野球選手が「将来なりたい職業」第１位だった時代でした。そのチケットを見せられた息子は大喜びしました。

当日、２人はちょっとしたオシャレをして、いつもより豪華なお弁当を作って球場に行きました。しかし、チケットを見せて中に入ろうとすると、係員に呼び止められてしまいます。

係員はすまなそうな顔をして、２人にこう言いました。

「これは入場券ではなく、割引券です。入場するためには、１人●●●●円の入場券を買って下さい。」

野球観戦をしたことがなかったお母さんは、入場料金が割引になる券を入場券だと勘違いしていました。いくら割引してもらっても、２人分の入場券を買う余裕はありません。仕方なく、お母さんと息子の２人は外のベンチでお弁当を食べて球場を後にしました。

帰りの電車の中、無言の母親に**「今日は楽しかったよ。」**と気づかう息子。

お母さんはそんな息子の気づかいが余計に辛く、

「ごめんね。お母さんが分かってなくてごめんね。野球が見られなくてごめんね。」

と謝り、涙をこぼしました。

やがて、月日が経ち、息子は社会人になり、結婚しました。子どもも生まれました。

そんな頃、母親が病に倒れました。

入院中に寝たきりの状態でしたが、一度だけ意識が戻った母親は思い出したようにこう言いました。

「野球、ごめんね。」

息子は**「楽しかったよ。ありがとう。お母さん。」**と言おうとしたが、涙で声が出ませんでした…。

インターネット上では実話として紹介されていましたが、フィクション（作り話）だとも言われています。私としては実話でも作り話でもどちらでもいいです。この話に描かれている**「お互いが、お互いを気づかう親子愛の本質」**がとても切なく、心が揺さぶられました。

熊本地震による被災を通して、お母さんに限らず、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、兄や姉、弟や妹…。お互いがお互いを自然に気づかう体験を通して、何かに気づかされたことも多かったと思います。

結婚式やお葬式など儀式的なことがないと、なかなか身近すぎて気づかないものですが、その意味では、辛い事ばかりではなかったのではないのでしょうか。**隠れた『ありがとう』**に気づくとき、人は大きく変わるものです。あなたたちは中学生。心身ともに大きく成長していく時期。**大きくなった、大きくなれたということは、誰かに愛された証拠**だと思います。

「親」を１番最初に大「切」にする…それが「親切」です。人には色々な事情があるので、若さから親御さんを許せないという人がいるかもしれません。そんな人は、まずあなたが幸せになってほしいです。あなた自身が幸せになったとき、きっと自然に親御さんと分かり合える自分がいるかもしれません。

もちろん、私も思春期には親に反抗した時期がありました。私は両親が教員であったため、何かと縛られていると思うことが多かったです。「俺には自由がない。周りがうらやましい。」しかし、今振り返れば、他人の家庭環境と比較しても、他人と比較しても何も成長はありませんでした。そして『自由』をはき違えていました。縛られていると勝手に思っていただけでした。

最後に問います。あなたたちは**『親を大切にしていますか』**…。

いつも本当にありがとう･･･。